

教材研究と教材の扱い方 (31)

『形』(菊池寛)

一

中学校の教材となつてゐる菊池寛の『形』(15三省堂 国語908)を取り上げたい。文学作品が本来的に持つてゐる特質として、作品が提示するテーマは幼少期から社会人までを含む。「形」というものは、我々の生活に、人生に、生き方に深く関わつてゐる。「形」が我々の周囲にどのようなに存在し、我々はそれをどのようなものとして認識し、それは我々にどのような力を持つて迫ってくるか、考えなければならぬ。中学校の教材として収録されたのは、中学校でも考えられるからである。また、本文が簡明で、内容も短いという点が考慮されたのであろう。一方、高等学校の教材としても収録されてゐるのは、テーマの大きさが作用してゐると考えてよからう。

本文は、次の通りである。

摂津半国の主であつた松山新介の侍大将、中村新兵

菅原敬三

衛は、五畿内、中国に聞こえた大豪の士であつた。

そのころ、畿内を分領してゐた筒井、松永、荒木、和田、別所など、大名小名の手の者で、「槍中村」を知らぬ者は、恐らく一人もなかつただろう。それほど、新兵衛は、そのしき出ず三間柄の本身の槍の矛先で、先駆けしんがりの功名を重ねてゐた。そのうえ、彼の武者姿は戦場において、水ぎわだつた華やかさを示していた。火のような猩々緋の羽織を着て、唐冠纓金のかぶとをかぶつた彼の姿は、敵味方の間に、輝くばかりの鮮やかさをもつてゐた。

「ああ、猩々緋よ、唐冠よ」と敵の雑兵は新兵衛の槍先を避けた。味方が崩れ立つたとき、激浪の中に立つ巖のように、敵勢を支えている猩々緋の姿は、どれほど味方にとって、頼もしいものであつたかわからなかつた。また、嵐のように敵陣に殺到するとき、その先頭に輝いてゐる唐冠のかぶとは、敵にとって、どれほどの脅威であるかわからなかつた。

こうして、槍中村の猩々緋と唐冠のかぶとは、戦場の華であり、敵に対する脅威であり、味方にとつては信賴の的であつた。

「新兵衛殿、おり入つてお願いがある。」と、元服してから、まだ間もないらしい美男の侍は、新兵衛の前に手をついた。

「なにごとじゃ、そなたと我らの間に、さような辞儀はいらぬぞ。望みというを、早う言つてみい」と、はぐくむような慈顔をもつて、新兵衛は相手を見た。

その若い侍は、新兵衛の主君、松山新介の子の一人であつた。そして、幼少のころから、新兵衛が守役として、わが子のようにいつくしみ、育ててきたのであつた。

「ほかのことでもおりない。明日は我らの初陣じゃほかに、なんぞ華々しい手柄をしてみたい。ついでに、御身様の猩々緋と唐冠のかぶとを、貸してたまらぬか。あの羽織とかぶとを着て、敵の目を驚かしてみとうござる。」

「ハハハハ、念もないことじゃ。」新兵衛は高らかに笑つた。新兵衛は、相手の子どもらしい無邪気な功名心を、快く受け入れることができた。

「が、申しておく。あの羽織やかぶとは、申さば中村新兵衛の形じやわ。そなたがあ品の品々を身に着けるうえからには、我らほどの肝魂をもたいでは、かなわぬ

ことぞ。」

と言いながら、新兵衛はまた高らかに笑つた。

そのあくる日、摂津平野の一角で、松山勢は、大和の筒井順慶の兵としのぎを削つた。戦いが始まる前、いつものように猩々緋の武者が、唐冠かぶとを朝日に輝かしながら、敵勢をしり目にかけて、大きく輪乗りをしたかと思うと、駒の頭を立て直して、一気に敵陣に乗り入つた。

吹き分けられるように、敵陣の一角が乱れたところを、猩々緋の武者は槍をつけたかと思うと、早くも三、四人の端武者を突き伏せて、また悠々と味方の陣へ引き返した。

その日に限つて黒革絨のよろいを着て、南蛮鉄のかぶとをかぶつていた中村新兵衛は、会心の微笑を含みながら、猩々緋の武者の、華々しい武者ぶりを眺めていた。そして自分の形だけすら、これほどの力を持つているということに、かなり大きい誇りを感じていた。

彼は、二番槍は自分が合わそうと思つたので、駒を乗り出すと、一文字に敵陣に殺到した。

猩々緋の武者の前には、戦わずして浮き足立つた敵陣が、中村新兵衛の前には、びくともしなかつた。そのうえに彼らは、猩々緋の「槍中村」に突き乱された

恨みを、この黒革緘の武者の上に復讐せんとして、たけり立つていた。

新兵衛は、いつもと勝手が違っていることに気がついていた。いつもは、虎に向っている羊のようなおじけが、敵にあつた。彼らがうろたえ血迷うところを突き伏せるのに、なんのぞうさもなかった。今日は、彼らは戦いをするときのように、勇み立つていた。どの雑兵もどの雑兵も、十二分の力を新兵衛に對し發揮した。一、三人突き伏せることさえ、容易ではなかった。敵の槍の矛先が、ともすれば身をかすった。新兵衛は、必死の力をふるった。平素の二倍もの力をさえふるった。が、彼はともすれば突き負けそうになった。手輕にかぶとや猩々緋を貸したことを、後悔するような感じが頭の中をかすめたときであつた。敵の突き出した槍が、緘の裏をかいて、彼の脾腹を貫いていた。

（出典『藤十郎の恋・恩讐の彼方に』／絵・クサナバシンペイ）

二

菊池寛の『形』は、中学校の教材として、また高等学校の教材としても採用されている。ここでは、中学校、高等学校両方を視野に入れて、教材研究と教材の扱い方を考えてみたい。

本文は、時間の流れと場面を基準にすれば、三段落に分かれる。

第一段は、書き出しから「味方にとつては信賴の的であつた」まで。

第二段は、「新兵衛殿、おり入つてお願いがある」から「新兵衛はまた高らかに笑つた」まで。

第三段は、時間的には第二段と同じ時間帯であるので一段落で括つても良いが、若侍と新兵衛に注目すれば、二つの段落として扱うのも一案であろう。

この作品の場合、段落分けに注意を払うことが必要である。第一段と第二、三段とは叙述の仕方が異なる。第一段では、中村新兵衛が「大豪の士」として評価が定まるまでの経過の説明であり、第二、第三段は、新兵衛と若侍の具体的な会話、また具体的な戦闘の場面であるからである。

第一段と第二、第三段との段落分けの基準を考えさせることは、国語の授業としては大切な作業となる。文章の書き方、叙述の仕方は、注目させておかなければならない。

全体の目標としては、

1 中村新兵衛における「形」の意味や制約などが、彼の人生に大きく関わっていることを理解する。

2 「形」にどの程度、意味を見出していたか、新兵衛と若侍を対比しながら考える。

3 中村新兵衛の人間としての評価や華々しい武功の評価を高めるために使用されている、強調表現や添加、助詞、感嘆詞、異名、対比表現、比喩などを指摘し、その効果を考える。

4 タイトルの「形」は作品だけでなく、我々が生活する世の中にも存在し、人物の特質、能力、人となりや広く社会生活一般にも関わっていることを理解し、人間や社会に対する「ものの見方や考え方」の拡充や深化を図る。

*

第一段の扱いについて考えたいのであるが、次の文章を読んで頂きたい。

摂津半国の主であつた松山新介の侍大将、中村新兵衛は、五畿内、中国に聞こえた大豪の士であつた。

そのころ、畿内を分領していた筒井、松永、荒木、和田、別所など、大名小名の手の者で、「槍中村」を知らぬ者は一人もなかつただろう。新兵衛は、三間柄の大身の槍の矛先で、先駆けしんがりの功名を重ねていた。彼の武者姿は戦場において、華やかさを示していた。猩々緋の羽織を着て、唐冠纓金のかぶとをかぶつ

た彼の姿は、敵味方の間に、鮮やかさを示していたのである。

敵の雑兵は新兵衛の槍先を避けた。味方が崩れ立つたとき、敵勢を支えている猩々緋の姿は、味方にとって頼もしいものであつた。また、敵陣に殺到するとき、その先頭の唐冠のかぶとは、敵にとつては脅威であつた。こうして、槍中村の猩々緋と唐冠のかぶとは、敵に対しては脅威であり、味方にとつては信頼の的となつた。

一部言葉を変えてはいるが、一読してお分かりのように、中村新兵衛の活躍ぶりを事実を中心に表現すれば、このようになるのである。

試案1 試案として、私はこの文章をプリントにして生徒に提示してみたい。そして、新兵衛の活躍ぶりが、より一層鮮やかになるには、どこにどのような表現を盛り込むのが良いか、自由に作成させてみたい。ヒントとして、「表現の効果を上げるために、強調表現、添加、推量の副詞、比喩、感嘆詞、対比表現、異名、助詞（副助詞）の使用など考えると良い（これらの事柄は、原文から抜いたものであり、原文には表現されているものである）」ことを示すのである。

試案2 試案1は、小説を書いたことの無い生徒にとって

は難しい作業である。試案2としては、どこにどのような表現を付け加えるのが良いか、補える箇所に * 印などを示すのも良い。生徒の負担を軽減させるには、補う言葉や表現を具体的に示すのが実際的であろうか。

試案3 試案1、2を考えた上で、その後教材本文を読み、自分の作品との違いを捉えさせる。いかに、作者が細かく表現に配慮し、格調とリズムとを大切に作品を書いているか、それを実感させたい。

これらの作業を生徒に課すことは、生徒に表現は意味内容だけを理解すれば良いという誤解から解放させることができる。作中人物を、また事態の推移をイメージ豊かにするために、どのような言葉を使用するか、どのように表現するのが効果的か、生徒の言語感覚を磨くのにきわめて有効的な作業となる。

言語感覚を磨くというのは、読みを深めるだけでなく、言語の使用を考えることが不可欠である。生徒の学習を身的に設定するだけでなく、生徒の今持っている言語を最大限に発揮させる作業も、教師は考えるべきであろう。

生徒に自分の理解語彙、使用語彙がどれほどのものであるか、認識させる作業を積極的に授業に導入することは考えておきたい。

試案4 試案1、2、3を行なった後に、第一段の読解を行なう。この第一段の扱いがどれほど深まるかによつて、第二段、第三段の読み深めが決まってくると言つて過言ではない。簡単に新兵衛の活躍をまとめてはならないということである。

【第一時の目標】

1 全文通読後第一段を扱う。第一段と第二、第三段との叙述の仕方の違いが、段落分けの基準であることを理解する。

2 中村新兵衛が「大豪の士」となるまでの経過を理解するとともに、叙述に工夫を凝らした作者の意図を考え、新兵衛の人となりや武功の目覚しさをイメージ豊かに捉える。

【発問】

1 先程全文を通読し、全体を三段に分けてもらいました。第一段は、中村新兵衛が「大豪の士」となるまでの経過説明ということで段落が設定できました。この段を読んで、経過さえ分かれば良いという読み方は、読みとしては十分ではありません。それだけでは、新兵衛の人物像や人となりが十分把握されたとはならないからです。

では、第一段では、何に注目すれば良いか、考えてい

きましよう。書かれていないところに眼を向ける必要があります。

2 まず、新兵衛が「大豪の士」となるにはなるだけの歴史があつたということです。まずはそこから考えていきましょう。

新兵衛が現時点（小説の中で今に最も近い時点）で高い評価を受けている、その表現から押さえておきましょう。どのように書かれていますか。

↓「侍大将」（これは出にくい可能性はある。教師から補うことも考えて良い）

「五畿内、中国に聞えた大豪の士」

「槍中村」、「恐らく、なかつただろう」

今指摘してもらつたとおりですね。それをまず押さえておきましょう。戦場における新兵衛の活躍ぶりは、別に書かれていますので、それはその時に考えましょう。

3 新兵衛とて、最初から今見てきたような高い評価を得ていた訳ではありません。当然新兵衛にも初陣があつた訳です。彼はどのようなでたちで、どのような心構えで臨んだと読めますか。本文全体をよく読んで答えてください。

↓ 若侍が、初陣に臨んで「狸々緋と唐冠」を借りに
来たことを考えれば、新兵衛は初陣から、その格好で参加したと読んで構わないであろう。

心構えとしては、敵兵からは彼の目立つ姿は格好の目標とされる訳であるから、彼が若侍に語つて聞かせる

「が、申しておく。あの羽織やかぶとは、申さば中村新兵衛の形じやわ。そなたがあ品の品々を身に着けるうえからには、我らほどの肝魂をもちたいでは、かなわぬことぞ。」から並大抵の心構えではないことを、十分に押さえておく必要がある。

4 では、初陣から今の新兵衛になるまでの、道のりを考えましょう。長い時間がかつたはずですね。そこを説明してください。また、それを明らかにするのには、新兵衛の実力と「形」の距離を考えることも大切です。時間の経過と共に両者がどのように変わつていったかも併せて説明してください。

↓「先駆けしんがりの功名」を得るためには、戦の度に戦果を挙げ、上官からの高い評価を得なければならぬ。「先駆け」も「しんがり」も、武士にとつてどれほど危険なものであるか、生徒が実感できるほどの読みをさせなければならぬ。

↓ 簡単な叙述の裏に、どれほどの内容があるかを読み取れるかどうかで、授業の成否が決まる。教材研究に深みが求められる所以である。

5 中村新兵衛が武功を重ねるにつれ、敵からも味方から

も高い評価を得られた表現があります。それを押さえておきましょう。ここも簡単に指摘するだけでは、不十分です。丁寧の説明してください。

↓「先駆け、しんがり」が、どれほど命懸けのことであるか、それらが「功名」と深く関わっていること。また、それらを重ねていくことによって、いや増しに新兵衛の評価がたかまつていくことなどを丁寧に押さえる必要がある。

↓新兵衛の武功を作者は、細かく丁寧に、また工夫を凝らして書いている。それらを余すところ無く指摘させたい。

・「それほど……重ねていた」

・「そのうえ……」・「水ぎわだった……」

・「火のような……」・「ああ、猩々緋よ、唐冠よ」

・「輝くばかりの……」・「戦場の華……」

・「敵に対する脅威、味方に対する信頼の的」

など、実に丁寧に工夫を凝らして表現されている。これらを余すところなく生徒に指摘させるのは、彼らの言語感覚を育てるのに重要な作業となる。個人作業ではなく、隣近所の席の生徒同士の話し合いを持たせるのも効果的である。

(以下、略)

〔板書〕

「形」

菊池寛

第一段

初陣の中村新兵衛

・いでたち

・猩々緋の羽織か？

・唐冠か？

・三間柄の全身の槍

・武功 鮮やかな戦果？

新兵衛の実力

距離がある

「形」

武功を重ねる中村新兵衛

・先駆け……戦闘を切つて敵陣に切り込む

・しんがり……撤退の時、最後尾を守護する。

共に命懸け、無事に帰陣できる保障はない

← 何度かの

新兵衛の実力

先駆け、しんがり

距離が縮まる

先駆け、しんがり

← 武人としての評価を高めていく 「形」

味方……頼もしい戦場の華

敵……どれほどの計り知れない脅威

← 評価の定まった中村新兵衛

・侍大将

新兵衛の実力

・五畿内・中国に

「形」は新兵衛の象徴

聞えた大豪の士

「形」だけで実力を示す

・「槍中村」（異名）

「形」の一人歩き

・「ああ猩々緋よ、唐冠よ」 「形」

三

第二段に移りたい。ここは、戦前夜の中村新兵衛と彼が守役をしていた主君の子の若侍との対話の場面である。この場面は、二人の対話にそれぞれのような気持ちがあるかを探ることが中心になるが、その気持ちが探れたことで教材研究が終わったとすることは避けたい。もっと探らなければならぬものがある。

それは、この段落（この場面）が持つ役割である。二人の心理の分析に加えて、この段落（場面）がなぜ必要だったのか、そこには何が書かれているのか。そこまで踏み込む必要がある。

まず元服して間もない若侍の方から見よう。若侍の心には何があったのか。明日は自分の初陣であることを頭に置き、「新兵衛殿、おり入ってお願ひがある。」と、……新兵衛の前に手をついた。ここで探っておかなければならないことは、侍にとっての「初陣の意味」である。

当然初陣であるだけに、実際の戦闘がいかなるものであるかは体験していない。高揚する気持ちと不安とが交錯するものである。しかし、結果が欲しいという気持ちが優先する。だから新兵衛の前に来たのである。これから依頼することは軽々しいものではないということを示すために「手をついた」のである。

新兵衛が大事にしている「猩々緋の羽織と唐冠」とを拝借したいというのは、厚かましく失礼なことになるかもしれないのである。「ほかのことでもおりない。明日は我らの初陣じゃほどこに、なんぞ華々しい手柄をしたい。……」という言葉に、結果を求めている若侍の気持ちが書かれている。そして、もう一つ大事なことは、「初陣」と「華々しい手柄」との結びつきである。

初陣でありながら、華々しい手柄を立てることは、武士にとって「自分の存在の意味」を世に訴えることになる。「自己証明」である。この自己証明は、敵陣に対しては警戒心や恐怖心を起こさせ、自陣の者に対しては「信頼に足る人間」としての評価を定めることになる。

*

この段落において、作品読解の上においても最も重要にしておかなければならないことは、「形」に対する新兵衛と若侍との意識の違いである。この二人が、「形」に対して、どれほどの意義を見出していたかという問題である。

若侍に次いで、新兵衛の気持ちの方に踏み込んでいくと、新兵衛の形に対する意識が伺える。

結論を先にいえば、共にこの段階において「形」にさほど深い意味があるようにには認識できてはいないのではないかとということである。若侍の礼を尽くした願いであつても、猩々緋の羽織と唐冠の借り出しを願い出ている。一方の新兵衛は、若侍の願い出を「子どもらしい無邪気な功名心」と見て「念もないことじゃ」と笑い飛ばしている。

新兵衛と若侍の「形」に対する意識は、同一ではない。若侍は新兵衛の「形」さえ拝借すれば、新兵衛同様華々しい戦果を挙げられるのではないか。新兵衛ほどの実力は持つていなくても新兵衛の「形」の力を借りれば、初陣であつても華々しい戦果を得られるのではないかと単純に思っていたのではないか。

一方新兵衛はどうであらうか。若侍の願い出を「子どもらしい、無邪気な功名心」と受け取り、「快く受け入れることができた」のである。「形」にさほど大きな意味を見出してはいない。結果的に「形」を軽視したことが、彼の悲劇をもたらすのであるが、彼はなぜこのような間違いを犯してしまったのであろうか。

それは第一段に書かれている。彼には自分の名声は、彼自身が幾多の戦で手柄を立て、その蓄積によつて得られたものであるということを知っている。大身の三間柄の槍を

駆使し先駆け、しんがりの大役を幾度となく果たしてきたのである。「形」が名声を得させてきたのではない。実力こそ大事にすべきものである。「形」は添え物であるという意識があつたのであろう。だからこそ、若侍の願い出を「子どもらしい無邪気な功名心」と「高らかに笑うことができた」のである。そして最後に

「が、申しておく。あの羽織やかぶとは、申さば中村新兵衛の形じゃわ。そなたがあ品の品々を身に着けるうえからには、我らほどの肝魂をもたいでは、かなわぬことぞ。」

と肝魂を強調したのである。この段階では、新兵衛と若侍の二人は「形」の持つ深い意味を見出してはいない。これを第二段の肝要な部分として扱うことが求められる。

【目標】

1 新兵衛と若侍との会話から、「形」に対する二人の意識を探る。

2 「形」に対する意識の違いは、二人の立場や経験の違いがもたらしていることを捉える。

【発問】

1 今日第二段を扱います。新兵衛と彼が「守役」として育てた若侍との会話が中心です。それぞれの言葉に、

二人のどういう気持ちがあるか探ることにしますが、そこで話は終わります。

2 作品の中で、第二段はどういう役割を果たしているかを探らねばなりません。特に第三段との関係において、重要な意味を持っています。それを考えて読んでください。(第二段通読)

3 第二段の読解に対して、少し板書を工夫しなければなりません。そのためには、二人の間で話題になっているものは何かをまず押さえる必要があります。それぞれの会話を発言の若い方から番号を付すとどうなりますか。付けてみてください。

4 そうですね。1、3が若侍、2、4、5が新兵衛の発言になります。二人の間で話題になっているものは、「猩々緋の羽織と唐冠」ですね。一語で言う「形」となります。

全体の関係が分かるように板書を工夫しましたが、これでよろしいですか。(板書で基本構造を示す)

5 1から5に、二人のどのような気持ちが込められているか、考えていきましょう。

1については、「手をついた」とありますが、その時の若侍の気持ちはどのようなものであったか。「本気だった」などという簡単な答えではいけません。詳しく彼の気持ちを説明してください。2については「はぐくむよ

うな慈顔」とありますが、これは新兵衛の若侍に対する、どのような気持ちが表れていますか。

6 3からが第二段の中心の部分です。ここからは丁寧に詳しく読んでいかなければなりません。

例えば、武士にとって「初陣の持つ意味」はどのようなものであったか。どのような意識で初陣に臨んでいたか。若侍の言葉から探らねばなりません。そして、若侍の願い出は新兵衛を説得するのに十分な説明になっていたか。4で新兵衛は、なぜ早く若侍の申し出を受け入れることができたか。5では、なぜ4に続けて5を補ったのかを考えなければなりません。

分かったところから、自分の判断や考えを書いてください。(作業)

(以下、略)

【板書】

第二段

若侍

元服して間もない

主君の子の一人、中村新兵衛が守役

(猩々緋と唐冠のかぶとを借りれば、手柄は立てられるか?)

・猩々緋と唐冠のかぶとを、なぜ借りようとするか?

受けたい

・どの程度の気持ちか？

3 「初陣……華々しい手柄をしてみたい。

猩々緋と唐冠のかぶと……貸しててもらなぬか……」

1 「新兵衛殿、おり入ってお願いがある。」

猩々緋と唐冠のかぶと

(「形」)

2 「そなたと我らの間に、さような辞儀はいらぬぞ……」

4 「ハハハハ、念もないことじゃ。」

相手の子どもらしい無邪気な功名心を快く受け入れることができた。

・なぜ相手の申し出を快く引き受けることができたのか？

・「形」に対して、どのような意識を持っていたか？

5 「〔羽織とかぶとは、中村新兵衛の形じゃわ。〕

我らほどの肝魂をもたいでは、かなわぬことぞ。」

・ここでいう「形」は、どういう意味か？

・新兵衛の言う「我らほどの胆魂とは」どういうものか？

中村新兵衛

大豪の士

若侍の守役

* 作品の中で、第二段の果たす役割とは何か？

四

第三段は、松山勢と筒井勢の戦闘の場面である。両軍の戦力は拮抗したもので「しのぎを削」るほどであった。時間的に見れば第二段と同じ時であり、若侍と新兵衛の戦いぶりを対比しながら扱うこともできよう。また、若侍の戦いぶりを一場面とし、また別に新兵衛の戦いの場面を一場面として扱うこともできよう。どこに着眼するかによって、板書も異なったものとなる。それぞれのポイントを示すと、次のようになるうか。

〔若侍の初陣の場面〕

・若侍は、「猩々緋と唐冠のかぶと」を身に付け、どのようにに闘おうとしたか。

↓ 「いつものように」 Ⅱ 「いつも新兵衛がやっているように」

↓ (新兵衛のように) 「唐冠かぶとを朝日に輝かしながら、敵勢をしり目にかけて、大きく輪乗りをしたかと思うと、駒の頭を立て直して、一気に敵陣

に乗り入った。」

↓ 新兵衛の戦に対するスタイルを、若侍は事前に情報を得ていたか、目撃していたか、つまり、事前に学習できていたことになる。

・若侍は、自分の力量と「形」の持つ意味を、果たして知り得たか？

↓ 結果は望ましいものであったが、自分の力量と「形」の持つ意味を十分知り得たとはならないであろう。このことを生徒に課題として提示したい。

【新兵衛の戦いの場面】

・（新兵衛が）「その日に限って黒皮緘のよろいを着て、南蛮鉄のかぶとをかぶった」のはなぜか

・自分が二番槍を合わそうと思ったのはなぜか。

↓ 一番槍は譲ったとしても、実力からして二番槍は自分が合わすのが当然

・新兵衛が予想していた戦いと実際の戦いの違いは、どのようなものであったか？

・予想した戦いと実際の戦いのずれは、どうして起こったのか？

・敵兵の予想外の戦いぶりは、新兵衛にどのような影響を与えたか？

・新兵衛が「形」の持つ意味が実感できたのは、いつか？

・新兵衛の悲劇は、なぜ起こったのか？

【目標】

1 若侍の戦いぶりを、「会心の笑み」で眺めた新兵衛の気持ち进行想像する。

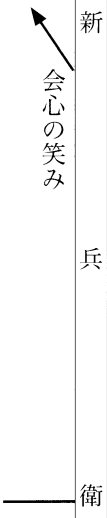
2 二番槍を合わそうとした新兵衛の気持ちを読み取り、新兵衛の戦いにおける予定と実際の違いを捉え、その原因を探索。

3 新兵衛の悲劇は、なぜ起こったのか。「形」を手掛かりに探索する。

4 「形」は新兵衛だけでなく、日常の我々にも大きく関わっていることを理解し、「形」の持つ意義や働きについて認識を深める。

【発問】（略）

【板書案 1】



若侍

一番槍

華々しい活躍

- ・新兵衛と同じスタイル、動き（事前に学習）、戦果
- ・若侍は自分の実力を把握できたか？

・「形」に意味を見出せたか？

二番槍の新兵衛

二番槍は自分

予定

自分の予想と敵兵の

戦いぶりのずれ

実際

- ・敵兵の予想外の戦いぶりは、新兵衛にどのような影響を与えたか？

- ・新兵衛が「形」の持つ意味や力が実感できたのは、い

つか？

- ・新兵衛の悲劇は、なぜ起こったか？

*我々が、この小説を読んで考えなければならないものは何か？

「板書案 2」次のような構図も可能であろう。

若侍の戦いぶり

・自分の「形」だけで、これほどの戦果が挙げら

れたことに満足

新兵衛の戦いぶり

予定

自分の予想と敵兵の

戦いぶりのずれ

実際

・敵兵の予想外の戦いぶりは、新兵衛にどのような影響を与えたか？

・新兵衛が「形」の持つ意味が実感できたのは、いつか？

・新兵衛の悲劇は、なぜ起こったのか？

*我々が、この小説を読んで考えなければならないものは何か？

五

最終的には、この小説が投げかけるテーマ（「形」）が、我々にどのように働きかけてくるか、また我々の周囲に「形」がどのように存在し、我々がそれとどのように付き合っているか、「形」の持つている制約に息苦しさを感じたり、逆に「形」に依存して生活していることなどを、押さえておく必要がある。教材の世界から大きく逸脱することは避けるとしても、社会的な視野を広げさせる必要があるように思う。

（本学名誉教授）